

高等教育推進センター紀要「リベラル・アーツ」13号
論文：いわゆるラ抜き言葉の形成に課される音節数の制約について

いわゆるラ抜き言葉の形成に課される音節数の制約について

On the Syllable Constraints on Word-formation of the So-called "Ra-dropped" Expressions in Japanese

江村 健介（高等教育推進センター）

Abstract

This paper is an attempt to provide a morphosyntactic analysis of the so-called "*ra*-dropped" expressions in Japanese in which the potential suffix *-rare* is apparently realized in a phonetically reduced form as *-(r)e* (e.g. *tabe-rare-ru* → *tabe-φ-re-ru* 'being able to eat'). It has been well-known that (un)acceptability of the phenomena is strongly affected by the number of syllables of verbs. Roughly speaking, while the "*ra*-dropped" forms can easily be derived from verbs whose syllable number is less than three, it cannot be formed when the syllable number is more than four. Thus far, little attention has been paid to the effectiveness of the syllable constraint on the "*ra*-dropped" forms. With this background, the present study carried out a questionnaire to Japanese adults on the acceptability of "*ra*-dropped" expressions with two different types of verbs on transitivity alternation patterns comprising the same number of syllables. Based on the data of the questionnaire, I will argue (i) that the constraint cannot adequately be effective in that it cannot predict the results in which a certain type of verbs is significantly more acceptable, and (ii) that the apparent "*ra*-dropped" forms are derived not from *-ra* deletion, but *-e* insertion into the head of GETP à la Nakajima (2011, 2014), which optionally occurs at the top of *vP*. The proposal explains the results of the questionnaire and it is compatible with observation in the fields of language acquisition that Japanese-speaking children erroneously produce lower one-tier conjugation verbs instead of potentials, only in verb pairs in which transitive morphemes are phonetically realized as *-e* (e.g. *tat-e-ru* 'stand'), but their intransitive counterparts show no morphological realization (e.g. *tat-u* 'stand up').

キーワード：ラ抜き言葉、可能動詞、形態統語論、音節数、質問紙調査

1. はじめに

いわゆるラ抜き言葉の形成可能性については、動詞の音節数が関与していることが多くの先行研究で指摘されており、動詞が4音節以上になると、ラ抜き言葉の形成が難しくなり、概して、その容認性が低くなるとされてきた（木下 1995, 井上 1998, 金水 2003）。他方、「ラ抜き」の適用対象となる、動詞の形態統語的特性に着目している先行研究は、極めて少ないと思われる。通事的に、特定の語彙から発生したとされ（青木 1996, 2010）、かつては方言

に限定的でもあった当該現象が、広範に使用されるに至っている現状に鑑みると、「ラ抜き」を生成する文法メカニズムを考察することは、生成文法理論の中心的な研究課題である、普遍文法の解明に有意義と考えられる。

本論では、ラ抜き言葉の容認性に関する質問紙調査の結果に基づいて、従来指摘されてきたラ抜きの適用に関する音節数の制約が、ラ抜き言葉の形成可能性に関する一般化として不十分であることを指摘する。そして、分散形態論の基本的想定に基づいて、ラ抜き言葉を含む可能動詞文の派生に関して代案となる統語分析を提示し、当該の分析によって、質問紙調査の結果を自然に捉えられることを示す。

2. 先行研究

2. 1. ラ抜き言葉の使用状況と研究の意義

可能文とは、ある事象の実現が可能か不可能かに関する表現形式のことであるが、日本語では、述語動詞の可能動詞化が、可能を表す最も生産的な表現形式とされており、可能動詞は、(1a-b) 及び (2a-b) にそれぞれ示すように、五段動詞の語幹には *-e* を、一段動詞（及びカ変動詞）の語幹には、*-rare* を付加することで形成される（金水 2003, 中野 2008, 日本語記述文法研究会 2009）¹⁾。

- | | | |
|-----------------------|--------------------------|--------------------|
| (1) a. 「話す /hanas-u/」 | → 「話せる /hanas-e-ru/」 | a'. 太郎は流暢にロシア語を話せる |
| b. 「飲む /nom-u/」 | → 「飲める /nom-e-ru/」 | b'. 次郎はたくさんワインを飲める |
| | | |
| (2) a. 「煮る /ni-ru/」 | → 「煮られる /ni-rare-ru/」 | a'. 母は上手に野菜を煮られる |
| b. 「食べる /tabe-ru/」 | → 「食べられる /tabe-rare-ru/」 | b'. 弟は3杯もご飯を食べられる |

(1a' -b') 及び (2a' -b') は、内的能力を有する主語が意思を持ってある動作を行うとき、その動作が、実現可能であることを述べており、例えば、(1a') は、「太郎が、なめらかで、よどみなく、ロシア語を話すこと」が、実現可能であることを述べている²⁾³⁾。

次に、ラ抜き言葉とは、「上一段・下一段・カ変活用の動詞に可能の意の助動詞「られる」が付いたものから「ら」が脱落した語」（『広辞苑 第五版』1998: 2779）と一般に定義され、「煮られる」「食べられる」などに対する「煮れる」「食べれる」のような表現形式のことを指す。ラ抜き言葉については、特に、国語学及び社会言語学の領域において、多くの研究がなされてきた⁴⁾⁵⁾。先行研究の考察の対象は、その発生要因、言語形式、言語使用に与える社会的要因など、多岐にわたる。本論の目的の一つは、上述の通り、ラ抜きの適用に課される音節数の制約が、ラ抜き言葉の形成可能性に関する一般化として不十分であることを指摘することであるが、「現在進行中の言語変化」というラ抜き言葉の性質上、その使用状況を把握しておくことが前提となるため、以下では、ラ抜き言葉の使用の変遷及び使用の現状を手短に見る。

井上（1998）によれば、明治・大正期には、ほぼすべての動詞で可能動詞化が成立している一方で、「見れる」「寝れる」のようなラ抜き言葉については、明治期に既に部分的に使用され始めていたと推察されるものの、当時は、中部や中国地方などの一部地域で限定的に使

用されていたに過ぎない⁶⁾。また、井上・鎗水（2002）は、ラ抜き言葉が20世紀初頭に現れ、地理的には変化が始まった中部、中国、四国でより変化が進んでいること、これらの地域と地理的には遠いにも関わらず、北海道にもいち早く普及したことを指摘している。このように、ラ抜き言葉は、明治期に、可能を表す表現形式として、特定の地域で限定的に使用され始めたことが窺える。

次に、明治期以降のラ抜き言葉の使用の変遷に目を向けると、井上（1998）は、1949年に各都道府県の大人と子供を対象とした質問紙調査では、「来られない」「食べられない」というラレル形式に対するラ抜き言葉である「来れない」「食べれない」の使用率は、（地域によって差異はあるものの）20%以下の使用率に過ぎなかったことを報告する一方、1970年に実施した同様の調査では、全国の小学生（1950年代生まれ）のうち、ラ抜き言葉の使用率が50%以下だったのは、北関東、山形、宮崎、佐賀のみだったこと、1994年に実施した全国の中学生（1980年代前後生まれ）を対象とした同様の調査では、使用率が50%以下だったのは、佐賀のみだったことを報告している。また、佐野（2009）は、大規模コーパスである『日本語話し言葉コーパス』に基づいた、明治期以降のラ抜き言葉の経年変化に関する分析を通して、ラ抜き言葉の使用が1920年代に始めて観察され、その後、使用率は、1960年代にかけてラレル形式の10%以下に留まる一方、1970年代以降は、使用率が急増し、約40%になっていることを指摘している。

このように、かつては方言に限定的であり、規範的な観点からは誤用とされてきたラ抜き言葉が、口語を中心に、今やほぼ全国的に用いられる状況に至っており、その使用頻度は、今尚、増加傾向にあると考えられる。従って、容認性に対する方言間、世代間などの差違は、一定程度存在すると推察されるものの、ラ抜き言葉が、可能を表す生産的な表現形式として使用されるに至っている現状を鑑みると、可能動詞と同様に、ラ抜き言葉を派生させる文法メカニズムを考察することは、理論言語学的な見地から、日本語の動詞句構造を解明する上で重要と言える（金水 2003, 高橋・江村 2015, 2016）。

2.2. ラ抜き言葉の形成と音節数の制約

前節で概観したように、ラ抜き言葉の使用率は、1970年代を契機として、ほぼ全国で増加傾向にあるというのが、共通認識となっている。以下では、多くの先行研究で指摘されている、ラ抜き言葉の容認性に与える主要因として、「動詞の音節数」を取り上げる。

上述の通り、ラ抜き言葉は現在進行中の言語変化であるため、あらゆる一段動詞及びカ変動詞に等しくラ抜きが適用されるわけではないことが、多くの先行研究で指摘されている（渡辺 1969, 中田 1982, 山本 1985, 井上 1998, 金水 2003）。例えば、渡辺（1969: 20-21）は、「語幹音節数の短いもの（「見る」→「見れる」）のほうが、語幹音節数が長いもの（「顧みる」→「顧みれる」）と比べて、『ら抜き』の形成に容易である」と述べている。また、井上（1998）は、前節で触れた質問紙調査の結果に基づいて、カ変のラ抜き言葉が、可能動詞化の成立後、すぐに全国に広がったと考えられること、「見る」「食べる」等、2音節や3音節の動詞では、ラ抜きが広がりやすく、「調べる」「考える」等、4音節以上の動詞では、ラ抜きの広がりが遅いことを指摘している⁷⁾。岡崎（1980）は、都内在住の中高生を対象とした質問紙調査の結果に基づいて、ラ抜き言葉が未然形の2音節動詞に多いこと、「見る」「着る」等、上一段

活用の特定の動詞の方が、カ変・下一段活用の動詞よりもラ抜きの適用を受けやすいことを指摘している。中田(1982)も、都内在住の高校生を対象とした質問紙調査に基づいて、岡崎(1980)と同様の結果を報告している。

ラ抜きの適用と動詞の音節数の関係について、先行研究によって表現の仕方に若干の違いはあるものの、一連の指摘によれば、概略、(3)の上段の動詞ほど、ラ抜きの適用を受けやすく、(3)の下段の動詞ほど、ラ抜きの適用を受けにくくなる⁸⁾⁹⁾。

(3) a. カ変動詞・2音節の上一段動詞

「来られる」→「来れる」 「見られる」→「見れる」

b. 2音節の下一段動詞・使用頻度が高い3音節の下一段動詞

「寝られる」→「寝れる」 「食べられる」→「食べれる」

c. (使用頻度を問わず、すべての)3音節以内の下一段動詞

「曲げられる」→「曲げれる」 「建てられる」→「建てれる」

d. 4音節以上の下一段動詞

「調べられる」→「調べれる」 「考えられる」→「考えれる」

(3a)の動詞の場合に、ラ抜き言葉の形成が最も容易である理由として、動詞の数と使用頻度が挙げられる。つまり、カ変動詞や上一段動詞は下一段動詞に比べて数が少ないだけでなく(藤村 2004)、先行研究で例示されている「来る」「見る」などの2音節動詞は、いずれも日常的に使用される動詞である¹⁰⁾。他方、(3b)に含まれる3音節の下一段動詞の中身や、ラ抜き言葉の形成可能性に関する、(3a)と(3b)の順序付けは、必ずしも明確なわけではない。例えば、中部地方や中国・四国地方などのラ抜き言葉が先駆的な地方出身の話者の文法では、音節数や、上一段活用か下一段活用かを問わず、生産的にラ抜き言葉を形成できるシナリオが容易に想定され、このような場合は、(3a)と(3b)を区別する必要性すらなくなる。

さて、3.2節で、詳細について述べるように、本論で、質問紙調査を通して検証するのは、(3c)と(3d)で例示している、3音節及び4音節の下一段動詞のラ抜き言葉の形成可能性である¹¹⁾。従来、指摘されてきた音節数の制約は、「動詞の音節数の長短が、下一段動詞のラ抜きの適用可能性を決定する」という、シンプルなものであり、この制約によれば、(3b-d)に挙げた下一段動詞に基づくラ抜き言葉の容認性は、(4)のようにまとめられる。

(4) 寝れる, 食べれる, 曲げれる, 建てれる > ? 調べれる, ?* 考えれる

(4)は、下一段動詞が4音節以上になると、ラ抜きの適用を受けにくくなることを示したものであるが、(個人差はあるにせよ)この一般化は、言語直感に矛盾しない(少なくとも、4音節以上の下一段動詞に基づくラ抜き言葉の方が、3音節以内の下一段動詞に基づくラ抜き言葉よりも、容認性が高いと判断される可能性は低い)と思われる。従って、下一段動詞に基づくラ抜き言葉の容認性を適切に予測できる限りにおいては、この制約は有効であることになる。

2.3. 残された課題

前節で概観した、ラ抜きの適用に課される動詞の音節数の制約は、国語学の分野を中心として、広く受け入れられてきた。他方で、言語事実を仔細に観察すると、この制約は、ラ抜き言葉の形成可能性に関する一般化として、経験的に十分とは言えないことを、以下で論証する。

まず、本論で採用するアプローチの具体的な説明に入る前に、再度、触れておくべき重要な点は、下一段動詞と上一段動詞の数量的違いである。つまり、下一段動詞は、上一段動詞に比べて、数が有意に多いため、下一段動詞に基づいたラ抜き言葉の語彙性や生成メカニズムを考察する際には、(音節数も考慮に入れた上で) 系統立った考察をすることが有効である。この点を踏まえて、本論で採用する、そして、大半の先行研究において見落とされてきたのは、形態統語アプローチである。Jacobsen (1992) でリスト化されているように、接辞 *e* が関与する自他交替は、多様な接辞ペアによって形態的・音声的に具現する。(5a-d) に、代表的な接辞ペアと、その例を挙げる。

- (5) a. 曲がる / 曲げる, 上がる / 上げる, 閉まる / 閉める (ar/e)
b. 立つ / 立てる, 付く / 付ける, 向く / 向ける (φ/e)
c. 遅れる / 遅らす, 枯れる / 枯らす, 逃げる / 逃がす (e/as)
d. 切れる / 切る, 折れる / 折る, 焼ける / 焼く (e/u)

(5a-d) において、下線部を付した下一段活用 of 自動詞、または他動詞は、3音節という点で共通しているが、それと同時に、これらの語形成に関わっている接辞 *e* は、自動詞形態素または他動詞形態素として、異なる振る舞いをしている。接辞 *e* が、自・他動詞の派生を含むヴォイス現象全般の成立に関して、多様な役割を担うことは、理論言語学の分野で多くの先行研究が指摘しているが(影山 1996, 2001, 鷲尾・三原 1997, 須賀 2000)、このような、自他交替に関わる動詞の形態統語的特性が、ラ抜き言葉の形成可能性に影響するか否かを考察している先行研究は、管見では皆無である¹²⁾。音節数の制約は、文字通り、「動詞の音節数」に課される制約であるため、仮に、(5a-d) に例示したような、動詞の形態統語タイプが、(音節数が同じであるにもかかわらず) ラ抜きの適用に影響するのであれば、音節数の制約では、この事実を全く予測することができない。

以上を踏まえ、本論では、ラ抜き言葉の形成可能性を、形態統語的な観点から体系的に考察することで、音節数の制約の有効性を検証する。そして、日本語話者を対象に実施した質問紙調査の結果に基づいて、当該の制約が、ラ抜き言葉の形成可能性に関する一般化として不十分であることを指摘する。その上で、本論で提示する統語分析が、質問紙調査の結果からだけではなく、日本語を学習中の子どもの自然発話資料からも支持されることを論じる。

3. ラ抜き言葉に対する形態統語アプローチ

ここまで、ラ抜き言葉の使用の変遷と、ラ抜き言葉の形成に課せられる動詞の音節数の制約について概観してきた。この制約は、(6) のように要約できる。

(6) ラ抜きの適用は、3音節以内の下一段動詞に対しては容易であるが、4音節以上の下一段動詞に対しては困難である。

当該の制約は、言語直感に矛盾しないと思われるだけでなく、ラ抜き言葉を許容する話者を対象とした、複数の質問紙調査の結果に基づいて裏付けられたものであるため、一見のところで、広く有効に見える。しかし、動詞の形態統語的な観点から考察すると、この制約は、ラ抜き言葉の形成可能性に関する一般化として、十分ではないことが分かる。以下ではまず、質問紙調査のデザインの前提となる、分散形態論の基本的想定について触れ、その想定を踏まえた上で、(ラ抜き言葉を含む)可能動詞文の派生について考察する。

3.1. 理論的前提と可能動詞文の派生

可能動詞文の派生に関する具体的な考察に入る前に、本論で採用する、分散形態論(Distributed Morphology)の基本的な考え方を(7a-b)に示す。

(7) 分散形態論の基本的想定(Marantz 1997, 2001)

- a. 語はもともと範疇未指定で、語根 $\sqrt{\text{Root}}$ と v などの機能範疇主要部が統語的に併合することで、その範疇が決定され、語彙挿入は、PF で起こる。
- b. 語形成を含む全ての構造は統語論で形成される。

(7a-b) を踏まえて、本論では、接辞の形態的・音声的な具現化によって表される、日本語のような膠着語における自他交替について、例えば、影山(1996, 2000)で提案されているレキシコンの語彙概念構造における「反使役化」のような派生関係によって捉えようとするのではなく、共通の語根 $\sqrt{\text{Root}}$ と異なる接辞の組み合わせから得られる相互作用によって捉える方向性を指向する(高橋 2015)¹³⁾。この考え方に立脚すると、例えば、(5a-d)で挙げた接辞ペアは、(8a-d)のように表される。

- | | |
|-----------------------------------------|----------------------------------|
| (8) a. 「曲がる /mag-a-ru/, 曲げる /mag-e-ru/」 | 「上がる /ag-a-ru/, 上げる /ag-e-ru/」 |
| b. 「立つ /tat-u/, 立てる /tat-e-ru/」 | 「付く /tuk-u/, 付ける /tuk-e-ru/」 |
| c. 「遅れる /oku-re-ru/, 遅らす /oku-ras-u/」 | 「枯れる /ka-re-ru/, 枯らす /ka-ras-u/」 |
| d. 「切れる /ki-re-ru/, 切る /ki-ru/」 | 「折れる /o-re-ru/, 折る /o-ru/」 |

(8a-d) は、自・他動詞の形態的・音声的な具現が、共通の語根 $\sqrt{\text{Root}}$ と異なる接辞との統語的な併合を通して実現されることを示しており、各々の形成過程において、「他動詞 → 自動詞」のような、派生関係の方向性は存在しない。これらの前提を踏まえた上で、本論では、(ラ抜き言葉を含む)可能動詞を、形態統語的な観点から、(9)のように定義する(高橋・江村 2015, 2016)。

(9) 動詞語幹に、接辞 e を後接することで、「可能」の意味を表す動詞のこと¹⁴⁾。

「読む /yom-u/」→「読める /yom-e-ru/」「曲げる /mag-e-ru/」→「曲げれる /mag-e-re-ru/」

本論の分析では、従来使用されてきた「ラ抜き言葉」という名称は、便宜上の呼称に過ぎず、当該の表現は、接辞 *e* を、一段活用及びカ変活用の動詞語幹に後接することで、可能の意味を表す点において、可能動詞の一形態と見なされる¹⁵⁾。

次に、(9) を踏まえて、可能動詞文の具体的な統語的派生について検討する。本論では、可能動詞文の派生に関する前提事項として、(10a-b) を援用し、可能動詞文の派生に関して、(11a-b) を仮定する。

(10) a. 内項と外項は、動詞化子である 'little' *v* と 'small' *v* にそれぞれ導入・認可される。

(Kratzer 1996, Borer 2005)

b. 自他交替に関わる形態素は 'small' *v* に具現する。(Pytkänen 2002, 2008)

(11) a. GET は、動詞 \sqrt{u} 'get' の文法化された語根で、主題役である経験者を付与する。

(Nakajima 2011, 2014)

b. 可能動詞文の形成に関与する接辞 *e* は、'small' *v* の上位を占める、「獲得・到達・完遂」といった意味的概念に関する機能範疇 GET として具現する。(高橋・江村 2015, 2016)

これらの想定の下で、本論では、有生物を主語として選択する典型的な可能動詞文が、(12) の基本構造を持つと分析する。

(12) $[_{GETP} \text{ 経験者 } i [_{vP \text{ } ec_i} [_{vP} \sqrt{\text{Root } v} v] \text{ Get}]]$ ^{16) 17)}

下一段他動詞「曲げる」と、五段他動詞「読む」を含む可能動詞文を例にとると、(13a-b) の各文は、概略、(13a' -b') のように分析される。

(13) a. あの手品師はスプーンを曲げれる a'. $[_{GETP} \text{ 手品師 } i [_{vP \text{ } ec_i} [_{vP} \text{ スプーン } \sqrt{\text{mag } v} e] e]$

b. 太郎はロシア語を話せる b'. $[_{GETP} \text{ 太郎 } i [_{vP \text{ } ec_i} [_{vP} \text{ ロシア語 } \sqrt{\text{hanas } v} v] e]$

可能動詞化の対象となるのは、有生主語の意思によって制御できる、非状態動詞であるという基本的想定の下、(13a' -b') において、*vP* 指定部に導入された外項 (= 音形を持たない空範疇) には、「動作主」が付与される。例えば、(13a') の主語「手品師」は、「スプーンを曲げる」という動作を実際に遂行する内的能力を所有し、意思を持って当該の行為に関与する項と見なされる。他方で、(11a) に示したように、GETP 指定部の要素には、「経験者」が付与される点で、可能動詞文の主語が、意味役割上、多義である点に注意されたい。本論の分析では、典型的な可能動詞文の有生主語が、「動作主」としてだけでなく、これらの動詞句によって表出されるイベントが含意する、「獲得・到達・完遂」といった意味的概念に関与する「経験者」としても認可される¹⁸⁾。

ここで、この分析を支持する証拠として、可能の意味の下位分類について見ることにする。可能の意味については、当該の動作を実現することが可能か不可能かに関する制約という観点から、従来、能動主体の能力を表す、(14a) のような「能力可能」と、能動主体の能力以

外を条件・理由によって影響を受ける、(14b) のような「状況可能」に大別されてきた（益岡・田窪 1992, 渋谷 1993, 日本語記述文法研究会 2009）¹⁹⁾。

- (14) a. 太郎は 100 メートルぐらいは泳げる。（能力可能）
b. 10 時になりますから、もう泳げます。（状況可能）

(14b) のように、条件節が共起する場合、当該の動作の実現が可能か否かは、（背景化した主語が、水泳に関する内的能力を所有するか否かに関係なく）外的要因に依存しており、この点において、主語は、動作主としてだけでなく、語用論的条件が満たされて、初めて当該の動作の実現に関与できる経験者と解釈される。実のところ、(13a-b) や (14a) のように、能力可能を表しているように見える、典型的な可能動詞文の主語は、語用論の影響を受けることがあるので、必ずしも、動作主として解釈されるとは限らない（青木 1997, 山岡 2003, 川端 2015）²⁰⁾。例えば、(15a-b) のように、主語の内的能力の所有を明確にする、程度や出来栄を表す副詞が共起すると、動作主の解釈が得られやすい。他方で、(15c-d) のように、主語の内的能力とは別の外的要因である、条件節や理由節が共起すると、経験者の解釈が得られやすくなる。

- (15) a. あの手品師は {十分に / 容易に} スプーンを曲げれる
b. あの手品師は {上手に / 優雅に} スプーンを曲げれる
c. 練習を重ねれば、あの手品師はスプーンを曲げれる
d. 調子がいいので、あの手品師はスプーンを曲げれる

本論の分析では、GETP 指定部と vP 指定部の要素に、それぞれ、経験者と動作主が付与されるため、主語の解釈が本来的に多義であることを自然に捉えられる。また、語用論的情報が、（項に主題役が付与された後に）LF で初めて解釈可能になるとすると、主語の解釈が語用論によって影響を受けても何ら不思議ではない（cf. Stemmer 1999）。

3.2. 質問紙調査

前節までの議論を踏まえ、本節では、ラ抜き言葉の形成可能性を、形態統語的な観点から検証するために行った質問紙調査の概要と、その結果について述べる。本論では、(i) 刺激文で使用する動詞を、音節数の観点で均等にした場合に、自他交替に関わる形態論が、ラ抜き言葉の容認性に影響するのか、(ii) 自他交替に関わる形態論が、仮に結果に影響するのであれば、それが何故かを考察する。

3.2.1. 参加者

参加者は、岩手県在住で、東北地方出身の日本語母語話者 43 名で、性別の内訳は男性 17 名、女性 26 名であった。調査実施時の平均年齢は、20 歳 6 ヶ月（標準偏差 7 ヶ月）であった²¹⁾。

3.2.2. 刺激と予測

2.3節で概観した、接辞 *e* が自他交替の形態的・音声的な具現に関与するペアのうち、(5a-b)の接辞タイプにおける他動詞形に基づく可能動詞を、刺激文に使用した（(16a-b)として再掲）。

- (16) a. 曲がる / 曲げる, 上がる / 上げる, 閉まる / 閉める (ar/e)
b. 立つ / 立てる, 付く / 付ける, 向く / 向ける (φ /e)

「自他交替に関わる形態論が、ラ抜き言葉の容認性に影響するのか」を検証すると同時に、音節数の制約の有効性を統計的に確認するため、同一の形態統語タイプに属する、3音節と4音節の2種類の動詞について、各20項目、計80項目を刺激文に使用した。各動詞群と、その例を、(17)に示す。

- (17) 動詞群 I : 3音節 曲げる, 上げる, 閉める, 決める (ar/e)
動詞群 II : 4音節 丸める, 狭める, 薄める, 鎮める (ar/e)
動詞群 III : 3音節 立てる, 付ける, 向ける, 開ける (φ /e)
動詞群 IV : 4音節 並べる, 進める, 続ける, 届ける (φ /e)

動詞群 I・IIでは、自他交替が接辞 ar/eにより具現するのに対して、動詞群 III・IVでは、他動詞形においてのみ接辞 *e* が具現する。これらの他動詞は、通例、有生物（主にヒト）を外項に選択する点で共通するが、語用論的情報などの外的要因が、容認性判断に影響することを極力避けるため、前節で触れた理由や条件等を表す副詞節は、刺激文に含めなかった。以下に、各動詞群の刺激文の例を示す。

(18) 動詞群 I

- a. あの手品師はスプーンを曲げれる
- b. あのレスラーはその重いバーベルを上げれる
- c. あの大工は寸分の狂いなくネジを閉めれる
- d. 久美子は短時間でプランを決めれる

(19) 動詞群 II

- a. 弟は器用に舌を丸めれる
- b. 僕はすぐに原稿の行間を狭めれる
- c. あのマスターは上手にウイスキーを薄めれる
- d. 警察隊はすぐに暴動を鎮めれる

(20) 動詞群 III

- a. 店長は正確に看板を立てれる
- b. 姉はきれいにマニキュアを付けれる

- c. 妹は好きな男子に照れることなく目を向けれる
- d. 僕は片手であのドアを開けれる

(21) 動詞群 IV

- a. あの手品師はきれいにカードを並べれる
- b. 花子はいつも我が道を進めれる
- c. 弟は10時間も運転を続けれる
- d. あの運送会社は当日中に荷物を届けれる

刺激文の提示順序が調査結果に影響するのを極力避けるため、提示順序について、カウンターバランスをとった。質問紙では、参加者に、「各文が、どの程度、日本語として容認できるか」について、(22) に示す5段階尺度で評価させ、いずれかに○を付けるように求めた。

(22) 5 = 完全に容認できる

- 4 = どちらかと言うと容認できる
- 3 = どちらとも言えない
- 2 = どちらかと言うと容認できない
- 1 = 全く容認できない

本調査では、上述の二つの形態統語タイプについて、音節数の観点で同数の刺激文で構成したため、形態統語タイプ間の比較では、容認性に有意差は観察されないことが期待される。また、(6) に要約した音節数の制約を踏まえると、3音節動詞の方が、4音節動詞よりも容認性が高いことが期待される。以上の予測をまとめると、(23a-b) のようになる。

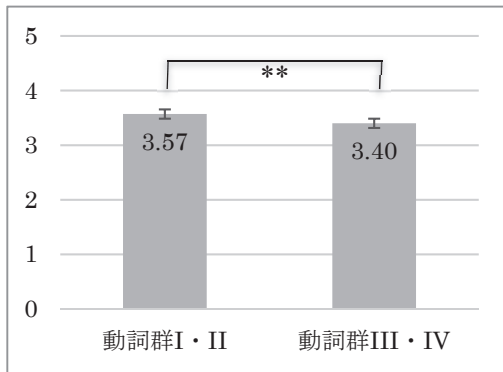
(23) 質問紙における容認性判断の予測

- a. 自他交替が接辞 *ar/e* により具現するタイプのラ抜き言葉と、他動詞形においてのみ接辞 *e* が具現するタイプのラ抜き言葉は、同程度に容認される。(動詞群 I・II = 動詞群 III・IV)
- b. 3音節動詞に基づいたラ抜き言葉は、4音節動詞に基づいたラ抜き言葉よりも、容認性が高い。(動詞群 I > II, 動詞群 III > IV)

上述の通り、音節数の制約は言語直感に矛盾しないと考えられるため、(23b) の予測が棄却される結果は想定しにくい。しかし、質問紙調査の回答や出版物の使用頻度に基づいて、考察している先行研究はあるものの、一定数の参加者を対象に実施した調査の統計結果に基づいて、当該の制約の有効性を検証している先行研究は、管見では見当たらない (cf. 中田 1982, 木下 1995)。従って、本論では、質問紙調査の分析を通して、(23a) に加えて、(23b) の予測を検証した。

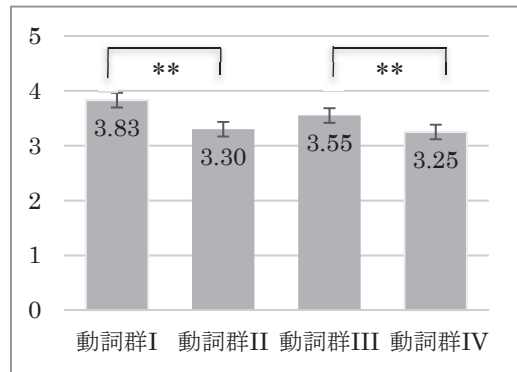
3.2.3. 分析結果

形態統語タイプ別の容認性の平均値及び各動詞群の容認性の平均値を、図1と図2に示す。



** $p < .001$

図1. 形態統語タイプ別の容認性の平均値



** $p < .001$

図2. 各動詞群の容認性の平均値

2 (= 動詞のタイプ) × 2 (= 音節数) の反復測定による分散分析を行った結果、動詞のタイプ [$F(1, 42) = 19.24, p < .001$] 及び音節数 [$F(1, 42) = 29.05, p < .001$] に、それぞれ有意な主効果が見られた。また、2つの要因の交互作用も認められた [$F(1, 42) = 14.19, p < .001$]。この結果は、動詞のタイプと音節数という2つの要因が、各々、ラ抜き言葉の形成可能性に影響を与えていることを示唆する。次に、(23a) の予測を検証するため、動詞群I・IIと動詞群III・IVを対象に、対応のある t 検定を行ったところ、前者の容認性 ($M = 3.57, SD = 0.88$) の方が、後者の容認性 ($M = 3.40, SD = 0.88$) よりも有意に高かった [$t(85) = 21.29, p < .001$]。このことから、「動詞の自他交替に関わる形態的示唆性が、ラ抜き言葉の容認性に影響する」ことが確認できた。具体的には、自他交替が接辞 *ar/e* により具現するタイプの方が、他動詞形においてのみ接辞 *e* が具現するタイプよりも、ラ抜き言葉が容認されやすいことが明らかになった。また、3音節動詞で構成された、動詞群Iと動詞群IIIを対象に対応のある t 検定を行ったところ、前者の容認性 ($M = 3.83, SD = 0.82$) の方が、後者の容認性 ($M = 3.55, SD = 0.83$) よりも有意に高かった [$t(42) = 36.24, p < .001$]。すなわち、一般的に、容認性が高いとされている、3音節動詞に基づくラ抜き言葉でさえも、一様に形成可能なわけではなく、その形成可能性は、動詞の形態統語タイプの影響を受けるということである²²⁾。

次に、(23b) の予測を検証するため、同じ形態的示唆性を持つ動詞群Iと動詞群II、動詞群IIIとIVを対象に、それぞれ対応のある t 検定を行ったところ、前者の比較においては、動詞群Iの容認性 ($M = 3.57, SD = 0.82$) が動詞群IIの容認性 ($M = 3.30, SD = 0.86$) よりも高く [$t(42) = 34.84, p < .001$]、後者の比較においては動詞群IIIの容認性 ($M = 3.55, SD = 0.83$) が、動詞群IVの容認性 ($M = 3.25, SD = 0.90$) よりも有意に高かった [$t(42) = 16.22, p < .001$]。つまり、自他交替に関して、同じ形態的示唆性を持つ場合、3音節の動詞に基づいたラ抜き言葉の方が、4音節の動詞に基づいたラ抜き言葉よりも容認されやすいことが分かった。

3.3. 考察

本節では、3.1 節で概観した理論的前提を踏まえて、質問紙調査の結果を考察していく。まず、日本語話者は、(形態統語タイプを問わずに) 4 音節動詞に基づいたラ抜き言葉よりも、3 音節動詞に基づいたラ抜き言葉を容認するという、(23b) の予測通りの結果が得られた。この意味において、ラ抜き言葉の形成可能性を予測する際に、(6) に示した音節数の制約が一定程度、有効と言える（少なくとも、当該の制約の有効性を否定することはできない²³⁾）。

他方で、質問紙調査における刺激文の数は、音節数の観点で等しく配置したため、(23a) の予測が棄却された結果、すなわち、「自他交替に関わる形態的示唆性が、(一般的に、容認されやすいとみなされている、3 音節動詞の場合でさえも) ラ抜き言葉の形成可能性に影響を与える」ということに関して、音節数の観点からでは、全く謎のままになってしまう。この結果に説明を与える上で、まず、(12) で示した、本論で想定する可能動詞文の基本構造を、(24) として再掲する。

(24) [GETP 経験者_i [_{vP} *eci* [_{vP} √Root *v*] *v*] GET]

(24) を踏まえると、動詞群 I・II 及び動詞群 III・IV の刺激文の例である (18a), (19a) と (20a), (21a) は、部分的に、(25a'-b') と (26a'-b') の統語的派生を辿ると一律に分析される。

(25) a. あの手品師はスプーンを曲げれる a'. [GETP 手品師_i [_{vP} *eci* [_{vP} スプーン √mag *v*] *e*] *e*]
b. 弟は器用に舌を丸めれる b'. [GETP 弟_i [_{vP} *eci* [_{vP} 舌 √marum *v*] *e*] *e*]

(26) a. 店長は正確に看板を立てれる a'. [GETP 店長_i [_{vP} *eci* [_{vP} 看板 √tat *v*] *e*] *e*]
b. あの手品師は素早く札を並べれる b'. [GETP 手品師_i [_{vP} *eci* [_{vP} 札 √narab *v*] *e*] *e*]

(25a) や (26b) における「手品師」のように、(生得的にしろ、後天的な学習の結果にしろ) 何らかの内的能力の所有を感じやすい名詞が主語である場合においても、(25b) や (26a) における「器用に」や「素早く」のように、主語の内的能力を際立たせる副詞が導入される場合においても、主語は、動作主指向であると思われるが、本論の分析の下では、*vP* 指定部の外項は、動作主として、GETP 指定部の要素は、経験者として、それぞれ認可されるため、可能動詞文の有生主語の解釈が、本来的に多義的であることを自然に捉えることができる点を想起されたい。

では、自他交替に関して、異なる形態的示唆性を持つ二種類の動詞群が、ラ抜き言葉の容認性に関して、有意差を示すのは何故であろうか。本論では、容認性が高いと判断される動詞群 I・II に基づく可能動詞文が、常に (24) の統語的派生を辿る、すなわち、日本語話者が、(ラ抜き言葉を全く容認しないという例外を除き) 可能形態素 *e* を GET として、他動詞形態素 *e* を *v* として、それぞれ認可する一方、動詞群 III・IV における動詞の他動詞形態素 *e* は、構造上、複数位置に生起可能と考え、(27a-b) を提案する。

(27) a. 動詞群 III・IV に基づく可能動詞文の容認性が相対的に低いのは、動詞句内の複数位

置に具現するという、他動詞形態素 *e* の統語的特性の反映そのものである。

- b. 動詞群 I・II に基づく可能動詞文と動詞群 III・IV に基づく可能動詞文を、同程度に容認する日本語話者は、後者についても、(24) の基本構造を用いて、前者と並行的に分析している。他方で、動詞群 I・II に基づく可能動詞文よりも、動詞群 III・IV に基づく可能動詞文を、相対的に容認性が低いと判断する日本語話者は、後者の他動詞形態素 *e* を、*v* ではなく、GET として分析している。

(27a-b) は、他動詞形態素 *e* が具現する構造上の位置が、唯一的ではなく、動詞句内における二つの主要部 (*v*, GET) に跨る可能性を述べたものであり、本論では、他動詞形態素 *e* のこのような振る舞いが、可能動詞化の容認性判断にバラツキを生じさせていると考える。この分析の下では、「立てる」「並べる」のような動詞群 III・IV に属する動詞を含む文は、(28a), (29a) に加えて、部分的に、(28b), (29b) の構造を持つと見なされる²⁴⁾。

(28) 店長は看板を立てた

- a. [_{VP} 店長 [_{VP} 看板 √tat *v*] *e*] b. [GETP 店長 [_{VP} 看板 √tat *v*] *e*]

(29) あの手品師は札を並べた

- a. [_{VP} 手品師 [_{VP} 札 √narab *v*] *e*] b. [GETP 手品師 [_{VP} 札 √narab *v*] *e*]

(28b), (29b) のように、他動詞形態素 *e* が、GET に具現すると分析する場合、GET の反復利用や、他の付加的事項を仮定しない限り、可能形態素 *e* が具現できる主要部は存在せず、可能動詞文は、原理的に派生されえない。このように仮定することによって、先行研究で見過ごされてきた、そして、音節数の制約では予測することのできない、「自他交替に関わる形態的示唆性の違いが、ラ抜き言葉の形成に影響を与える」という質問紙調査の結果に対して、首尾よく説明を与えることができる。

さらに、この分析を支持する証拠を、日本語を学習中の子どもの自然発話資料から得ることができる。中石 (2016) は、(動詞群 III・IV に属する) *eru* 他動詞が、五段自動詞の可能形と同一形態であり、両者が混同されやすいことを指摘した上で、日本語を学習中の子どもが、可能動詞を産出すべき文脈で、(30a-b) のように、下一段他動詞を用いた誤用形も産出することを報告している。

(30) a. (電気をつけようとして) 「電気がつけん」(3:3) (cf. つけられない)

- b. (物を持って来ないことを叱られ) 「届けなかった」(3:11) (cf. 届けられない)

これらの発話は、子どもの文法において、動詞群 III・IV に属する動詞の語幹に後接する形態素 *e* が、可能形態素と他動詞形態素の二つの役割を果たしている（あるいは、この月齢時において、GET と *v* の構造的・意味的な棲み分けが確立されていない）可能性を示唆する²⁵⁾。本論の分析では、動詞群 III・IV に属するタイプの場合には、形態素 *e* が、(大人の文法でさえも) 可能動詞化としてだけでなく、他動詞化としても GET に具現すると見なされるた

め、日本語を学習中の子どもが、動詞群 III・IV に属するタイプに限って、可能動詞を産出すべき文脈で、下一段他動詞を産出するという観察に対して、自然な説明を与えることができる。

この点に関して、高橋・江村 (2017: 25) は、日本語を学習中の2歳～2歳半頃の子どもが産出した、可能動詞と自・他動詞の発話例を検証した上で、(31)を提案している (cf. 大久保 1967, 伊藤 1990, 渋谷 1994, 荒井 2006)。

(31) 可能動詞と自他交替の獲得の時系列上の並行性は、形態素 *e* を介した、可能動詞と下一段動詞の獲得の連携そのものの反映であるため、可能動詞の獲得は、特定の活用型 (下一段活用) と相関を示すことになる²⁶⁾。

(31)を踏まえると、母語獲得の観察可能な最初期では、GETのみが利用可能であり、子どもは、この段階で、形態素 *e* を、「獲得・到達・完遂」といった意味的概念を含意する複合体として、産出・処理しており、その後、成熟とともに、他動性や動作主性といった意味的概念を、GET から *v* に構造的・意味的に棲み分けていくシナリオが考えられる。このシナリオが正しい方向性とする、(少なくとも) 最初期に観察される、「付ける」「届ける」のような *eru* 動詞に含まれる接辞 *e* は、可能形態素か、他動詞形態素かを、明確に区別されずに産出されていることになるが、これは推測の域を出るものではなく、更なる検証が必要である²⁷⁾。

4. 結語

本論では、ラ抜き言葉の形成に関わる動詞の音節数の問題を取り上げ、音節数の制約について、形態統語的な観点から再検討した。当該の制約は、一定程度、有効と考えられる一方、質問紙調査の結果に基づいて、当該の制約が、ラ抜き言葉の形成可能性に関する一般化として、不十分であることを指摘した。その後、分散形態論の基本的枠組みの下で、ラ抜き言葉を含む可能動詞文の派生に関して代案を提示し、GET と *v* が、指定部の要素にそれぞれ経験者と動作主を付与すると想定することで、可能動詞文の主語が、本来的に多義であることが自然に導かれること、自他交替の具現に関しては、他動詞形態素 *e* が、特定の接辞ペアでは、*v* に加えて GET に生起すると分析することで、質問紙調査の結果が首尾よく捉えられることを論じた。

最後に、ミニマリスト・プログラム (Chomsky 1995, 2000, 2005 など) (以下 MP) における母語獲得研究の観点から、接辞 *e* の多義的な振る舞いを考察する意義について触れておきたい。母語獲得は、生成文法理論の最初期から一貫して、中心課題の一つとして位置付けられ、ヒトに固有であり、遺伝的に規定された、言語機能の中核である普遍文法 (以下 UG) と、生後、外界から受ける言語経験の相互作用によって達成されると仮定されてきた。MP 以前の枠組みでは、UG には、豊かで複雑な原理が存在し、それが母語獲得の観察可能な最初期から、子どもの知識を制約していると仮定され、母語獲得研究は、この仮説の妥当性を、様々な手法を用いて経験的に強固にしてきた。他方、MP では、これまで UG に固有と考えられてきた原理を、(第三要因と呼ばれる一般自然規則に還元することで) 可能な限り減らす方

向性を指向する、「極小のUG」が掲げられている。従って、この状況下において、母語獲得研究が、MP以前と同様に、UG原理の早期発見に関する観察を通して、文法理論に寄与していくことは難しいと思われる(杉崎 2015)。

この問題を考えるにあたって、Goro et al. (2007)、郷路 (2013) は、「極小のUGと母語獲得研究の両立」について、興味深い提案を行っている。Goro et al. (2007) は、大人の日本語話者が、捕文内に数量詞を含んだ文に関する作用域の解釈について、系統だったバラツキを示すことに着目し、ある個人が獲得した文法の性質の一部は、生得的言語知識や言語経験に起因するのではなく、「偶然の産物」である可能性(ランダム選択説)について言及している²⁸⁾。加えて、郷路 (2013: 59) は、「ランダム選択による獲得が、他の様々な文法知識に関しても主張し得るものであるのであれば、その度合いに応じて生得的言語知識の必要性は薄れることになる」と述べている。

可能動詞文に話を戻すと、本論における質問紙調査の参加者は、大半が岩手県出身であり、動詞群 III・IV に基づくラ抜き言葉の容認性判断に関するバラツキが、言語経験に起因するとは考えにくい。本論では、動詞群 III・IV の場合は、大人の日本語話者であっても、他動詞形態素 *e* が、二つの主要部 (*v*, GET) に生起するという立場を採っており、質問紙調査の結果を、母語獲得過程におけるランダム選択の一例として、みなすことができるかもしれない。これは机上の論理であるが、大人に加えて、子どもを参加者として、この仮説の妥当性を実証的に追究していくことは、極小のUGの追求という点で、重要な研究課題と考える。

付記

本論は、日本言語学会第152回大会(2016年6月25日、慶應義塾大学)及び日本語文法学会第18回大会(2017年12月2日、筑波大学)において口頭発表した内容の一部に大幅な加筆修正を加えたものである。各発表及びその前後に多くの方から有益なコメントをいただいた。特に、共同研究者である高橋英也氏に厚く御礼申し上げたい。また、2名の学外査読者から貴重な示唆や助言をいただくことができた。本論における全ての不備や誤りの責任が、筆者にあることは言うまでもない。

参考文献

- 青木博史 (1996) 「可能の成立について」『語文研究』第81号 . 45-56.
青木博史 (2010) 「第一部 可能動詞の派生」『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房。
青木ひろみ (1997) 「《可能》における自動詞の形態的分類と特徴」『言語科学研究 神田外語大学研究紀要』第3巻 . 11-26.
荒井文雄 (2006) 「日本語における可能表現の習得過程」『京都産業大学論集』人文科学系列 第34号 . 1-23.
Borer, Hagit (2005) *The Nominal Course of Events*. Oxford University Press.
Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” in Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) , *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.

- Chomsky, Noam (2005) "Three Factors in Language Design," *Linguistic Inquiry* 36: 1-22.
- 江村健介・高橋英也 (2017) 「可能動詞と自・他動詞の獲得過程から見る接辞eの役割について」『日本語文法学会第18回大会予稿集』238-245. 日本語文法学会.
- Fuji, Chisato, Tomoko Hashimoto, and Keiko Murasugi (2008) "A VP-Shell Analysis for the Undergeneration and the Overgeneration in the Acquisition of Japanese Causatives and Potentials," *Nanzan Linguistics* 4: 21-41.
- 藤村泰司 (2004) 「動詞分類判別法* - 「辞書形」法が「ます形」法より優れている一つの理由 -」
International University of Japan Working Papers, Vol.14. 29-35.
- 伊藤克敏 (1990) 『こどものことば: 習得と創造』勁草書房.
- 井上文子 (1991) 「男女の違いから見たことばの世代差「標準」意識が男女差をつくる」『月刊日本語』6月号. 14-18. アクル.
- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』岩波新書.
- 井上史雄・鎌水兼貴 (編) (2002) 『辞典 <新しい日本語>』東洋書林.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語』大修館書店.
- Jacobsen, Wesley M. (1992) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Kuroshio Publishers.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版.
- 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他交替』33-70. ひつじ書房.
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対称 動詞の意味と構文』大修館書店.
- 川端元子 (2015) 「アスペクト形式「ている」を伴う可能動詞句の意味と特性」『愛知工業大学研究報告』第50号. 46-52.
- 木下哲生 (1995) 「一段動詞およびカ変動詞の可能動詞化現象の現状 (1970年以降の漫画と1993年以降のテレビ番組を資料として)」『防衛大学校紀要 (人文科学分冊)』71号. 76-116.
- 金水敏 (2003) 「ラ抜き言葉の歴史的研究」『言語』32 (4), 56-62. 大修館書店.
- Kratzer, Angelika (1996) "Severing the External Argument from its Verb," in Johan Rooryck and Laurie Zarin (eds.), *Phrase Structure and the Lexicon*. 109-137. Kluwer.
- 郷路拓也 (2013) 「ミニマリストプログラムと言語獲得研究」『生成言語研究の現在』41-66. ひつじ書房.
- Goro, Takuya, Tomohiro Fuji, Utako Minami, and Masatoshi Koizumi (2007) "The Acquisition of Anti-reconstruction and Grammar Variation in Adult Japanese," Paper presented at GLOW in Asia VII. Chinese University of Hong Kong.
- 国立国語研究所 (1981) 「大都市の言語生活分析編」『国立国語研究所報告』70/1: 234-345. 三省堂.
- Marantz, Alec (1997) "No Escape from Syntax: Don't Try Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon," *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 21: 201-225.
- Marantz, Alec (2001) "Words," ms., MIT.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版.
- Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004) "Three Pieces of Acquisition Evidence for the v-VP Frame," *Nanzan Linguistics* 1: 1-19.

- 中石ゆうこ (2016) 「縦断的発話データに基づく対のある自他動詞の習得研究」『県立広島大学化学部紀要』第11巻, 75-85.
- Nakajima, Takashi (2011) “On the Morphosyntactic Transparency of (S) ase and GETP,” *Proceedings of the 19th Japanese/Korean Linguistics Conference*. 199-214. CSLI Publication.
- Nakajima, Takashi (2014) “The Formation of Predicate “Word”: A Decompositional Approach,” Handout. Keio University Linguistics Colloquium.
- 中田敏夫 (1982) 「可能表現変遷に関する一検証－現代東京の高校生の調査より－」『日本語研究』第5号, 64-71. 東京都立大学国語学研究室.
- 中野琴代 (2008) 「日本語の可能動詞」『下関市立大学論集』第52巻 第1-2合併号, 103-114.
- 中本正智 (1985) 「東京語のゆれについての考察」『東京都立大学 人文学会 人文学報』173号, 164-168.
- 新村出 (編) (1998) 『広辞苑第五版』岩波書店.
- 西脇里帆 (2015) 「レ足す言葉の役割について」南山大学文学部 研究プロジェクト論文.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版.
- 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』東京堂出版.
- 岡崎和夫 (1980) 「『見レル』『食ベレル』型の可能表現について－現代東京の中学生・高校生について行った一つの調査から－」『言語生活』No. 340. 64-70. 筑摩書房.
- Pykkänen, Liina (2002) *Introducing Arguments*. Doctoral Dissertation. MIT.
- Pykkänen, Liina (2008) *Introducing Arguments*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 真田真治 (1983) 『日本語のゆれ』南雲堂.
- 佐野真一郎 (2009) 「現代日本語のヴォイスにおける進行中の言語変化に関する数量的研究－「ら抜き言葉」, 「さ入れ言葉」, 「れ足す言葉」を例として－」*Sophia Linguistica: Working Papers in Linguistics* (57) : 343-358.
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と展開」『大阪大学文学部紀要』第33巻 第1分冊.
- 渋谷勝己 (1994) 「幼児の可能表現の獲得」『無差』創刊号, 23-40.
- 辛昭静 (2004) 「「レ足す言葉」の使用率に影響する言語内的要因と外的要因－母語話者と日本語学習者の比較を通して－」『計量国語学』第24巻6号, 290-307.
- Stemmer, Brigitte (1999) “A On-Oine Interview with Noam Chomsky: On the Nature of Pragmatics and Related Issues,” *Brain and Language* 68: 393-401.
- 須賀一好 (2000) 「日本語動詞の自他対応における意味と形態との相関」丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』111-131. ひつじ書房.
- 杉崎鉦司 (2015) 『はじめての言語獲得－普遍文法に基づくアプローチ』岩波書店.
- 高橋英也 (2015) 「日本語の使役起動交替に対する形態統語的アプローチ」『リベラル・アーツ 岩手県立大学 高等教育推進センター紀要』第9号, 35-48.
- 高橋英也・江村健介 (2015) 「可能動詞の形態統語論に関する一考察：接辞 *e* の分布の観点から」『日本言語学会第151回大会予稿集』236-241. 日本言語学会.
- 高橋英也・江村健介 (2016) 「いわゆるラ抜き言葉の形成における形態統語的制約について」『日本言語学会第152回大会予稿集』56-61. 日本言語学会.
- 高橋英也・江村健介 (2017) 「可能動詞の文法とその獲得に関する一考察－村杉説に対する批判的検討－」『リベラル・アーツ 岩手県立大学 高等教育推進センター紀要』第12号, 15-33.

- 竹沢幸一 (2014) 「「可能形+テイル」構文の統語と解釈」中日理論言語研究会 第39回研究会発表論文集.
竹沢幸一 (2015) 「2種類の「可能動詞+テイル」構文」深田智・西田光一・田村敏広 (編)
『言語研究の視座』266-279. 開拓社.
寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版.
Ura, Hiroyuki (1996) *Multiple Feature-Checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*. Doctoral dissertation. MIT.
鷲尾龍一・三原健一 (1997) 『ヴォイスとアスペクト』研究社.
渡辺実 (1969) 『行ける』『見れる』一口語における助動詞複合の問題―『月刊文法』6月号, 18-25. 明治書院.
山岡政紀 (2003) 「可能動詞の語彙と文法的特徴」『日本語日本語学』第13号, 1-36.
山本稔 (1985) 「話し言葉における『来れる』『見れる』『出れる』等の可能表現の実態と文法教育 (4)」
『山梨大学教育学部研究報告 第1分冊 人文社会科学系』第36号, 101-108.

注

- ¹⁾ 可能を表す他の表現形式として、「動詞連用形 + ウル, エル」や、「動詞連体形 + コトガデキル」などが挙げられる。可能動詞も含めたこれらの可能表現は、相互に置き換え可能な場合と置き換え不可能な場合があり、それらは動詞の形態的特性、文体、命題内容など、文法内外の要因によって決定される。詳細については、中野 (2008) を参照されたい。
- ²⁾ 可能動詞化の入力となる動詞には、外項の動作主性や意思性に関する意味的制約が課せられることが伝統的に指摘されており、以下の例が示すように、この意味的制約を満たさない状態動詞が可能動詞化されると、概して、容認性が低くなる (cf. 井上 1976)。
(i) a. *彼女は母親に似れなかった b. *大気汚染で洗濯物が白く乾けない
- ³⁾ 可能の意味については、(1a'-b') 及び (2a'-b') のように、必ずしも、主語名詞句の内的能力を指すわけではない。この問題については、3.1 節で、再び取り上げる。
- ⁴⁾ 以下で詳述するように、本論では、いわゆるラ抜き言葉を、「一段動詞とカ変動詞に接辞 *e* を後接することで、可能動詞化したもの」と定義するので、「ラ抜き言葉」という名称は、便宜的に用いているに過ぎない点に注意されたい (高橋・江村 2015)。
- ⁵⁾ ラ抜き言葉に関する先行研究の概観については、辛 (2009) が詳しい。
- ⁶⁾ 当初、ラ抜き言葉が方言的であった背景には、特定の地域では「可能」の意味を、「尊敬」などのラレル形式が持つその他の意味から区別する必要がある他、世代や性別などの社会的要因があったと推察される。世代間とラ抜き言葉の使用率の関係については、真田 (1983)、中本 (1985)、性別とラ抜き言葉の使用率の関係については、国立国語研究所 (1981)、井上 (1991) を参照されたい。
- ⁷⁾ 本論では、語尾「ル」を含めて、動詞の音節数を数えることにする。
- ⁸⁾ ここでは、地域性、年齢、性別などのラ抜き言葉の使用に与える社会的要因を考慮に入れずに述べている点に注意されたい。
- ⁹⁾ 可能動詞の強調表現である、いわゆるレ足す言葉の派生にも音節数の制約が働くことが知られている (辛 2004, 西脇 2015)。具体的には、以下に示すように、3音節以上になると、概して、「レ足す」の適用を受けにくくなる。
(i) a. 「読める」「見れる」「切れる」 b. 「*逃げれる」「*破れる」「*謝れる」

他方で、西脇（2015）が指摘するように、3音節動詞に基づくレ足す言葉には、「食べられる」のように容認性可能な事例も見受けられる。レ足す言葉は、1990年代以降、ラ抜き言葉が先駆的な地域に限定して使用されるようになった新しい言語変化とされ、その点で、ラ抜き言葉と同列に扱うことに対しては慎重であるべきであるが、本論の分析が正しい方向性だとすると、レ足す言葉の形成可能性もまた、動詞の形態統語構造的特性に還元できるかもしれない。

¹⁰⁾これを踏まえると、「来れる」「見れる」などのラ抜き言葉は、言語計算が関与しない語彙的動詞と考える方が自然かもしれない。

¹¹⁾本論では、音節数を問わず、上一段動詞と下一段動詞は、形態統語的な観点から異なるタイプの動詞とみなし、以下では、下一段動詞の可能動詞化に焦点を当てて議論を進める。

¹²⁾例えば、(5d)における接辞 *e* は、自動詞形態素であるが、以下に示すように、この自他交替パターンにおける自動詞形態素 *e* は、外項を抑制する働きをするとともに、状態変化の達成に、総称的動作主を含む働きをすることが知られている（影山 2001）。

(i) a. 古いロープが（勝手に）切れた （反使役→動作主なし）

b. そのロープは（手で簡単に）切れる （中間動詞→動作主あり）

¹³⁾例えば、影山（1996）では、「切れる / 切る」「折れる / 折る」のような接辞ペアにおける自動詞形態素 *e* に関して、以下のような説明を与えている。

(i) *-e* は概念構造において使役主と変化対象を同定する働きをもつものとみなすことができる。形式的に言えば、内項と同一指示を外項に与え、それによって外項を抑制するということである。

$x = y \text{ CONTROL } [(y) \text{ BECOME } [y \text{ BE AT } -z]]$

反使役化が妥当である限りにおいては、当該の接辞ペアでは、他動詞形が無標であることになるが、江村・高橋（2017）、高橋・江村（2017）は、日本語を学習中の子どもによって産出された自他交替の誤用に基づいて、反使役化に対する経験的な反例を挙げている。

¹⁴⁾ /r/ の生起について、本論では、母音連鎖を避ける挿入子音と見なすと述べるに留めたい。一名の査読者より指摘いただいた通り、現在時制の五段動詞の場合、(ia-b) のように、子音連鎖を避けるために、/r/ 削除が適用されるというシナリオも考えられる。

(i) a. 「読む」 /yom-ru/ → /yom-ø u/ b. 「居る」 /ir-ru/ → /ir-ø u/

「食べれる /tabe-re-ru/」のように、動詞句内に生起する接辞の音声的具現としての /r/ は、時制形式として生起する /r/ と、母語獲得の過程において、質的にも、量的にも異なる特性を有するとの観察に基づき（cf. 渋谷 1994, Fuji, Hashimoto, and Murasugi 2008）、ここでは、両者を別の現象と見なすと述べるに留め、この問題に関して、これ以上立ち入らないことにする。/r/ の生起に関する具体的な考察は、今後の課題としたい。

¹⁵⁾先行研究と表現を統一する観点から、カ変及び一段動詞語幹に *-e* を後接することで派生した（と本論で分析する）可能表現について、以下でも、「ラ抜き言葉」という用語を用いることにする。

¹⁶⁾可能動詞化には、動作主の抑制（agent defocussing）が関わるという洞察の下で、ここでは、*v* 指定部に生起する（可能動詞化の入力となる動詞がとる）外項は、統語構造上は何らかの空範疇（*ec*: PRO もしくは移動されたコピー）として存在するのみであると仮定する。可能動詞文に関する伝統的な統語分析については、井上（1976）、Ura（1996）を参照されたい。

¹⁷⁾高橋・江村（2015）は、「寝られる、食べられる」のようないわゆるレ足す言葉の容認性に関する方言間の差異を捉えるために、(12)の構造を仮定した上で、レ足す言葉が先駆的な中部地方などの方言では、可

形態素 *e* が随意的に GET から *v* に「再分析」される、という提案を行っている。

- ¹⁸⁾ 可能動詞文が持つその他の基本的な特徴の一つに、「状態性」がある。例えば、時制が単純現在である (ia) は、主語であるマジシャンが、スプーンを曲げる内的能力を有することを表すと同時に、このマジシャンが、恒常的であれ、一時的であれ、その状態にあることを表している (cf. 益岡 1987)。

(i) a. あのマジシャンはスプーンを曲げれる (能力・状態 / 総称)

b. あのマジシャンは昨日スプーンを曲げた (特定の時空間における能力の出現)

これに関連して、一名の査読者より、本論の分析の下で、このような可能動詞文が表す状態性が、どのように導かれるのかについて指摘をいただいた。上述の通り、本論では、Get を、「獲得・到達・完遂」といった意味的概念を表す主要部とみなしており、それと異なる意味概念である「状態性」を、当該の主要部に還元することはできない。これを踏まえて、過去時制の文である (ib) に目を向けると、当該の文は、「主語の状態性」ではなく、「主語が有する特性 (能力) が、特定の時空間に出現する出来事」を叙述する点で、(ia) と対照的である。つまり、可能動詞文が表す状態性を捉えるには、(12) に示した可能動詞文の基本構造と矛盾しないものの、動詞句よりも階層的に上位の機能範疇 (= 少なくとも、時制辞句 / TP) の特性を視野に入れて分析しなければならないことに、注意しなければならない。

- ¹⁹⁾ 厳密には、能力可能、状況可能に加えて、受動的可能 (対象可能) が挙げられている (寺村 1982, 山岡 2003)。対象可能とは、以下のように、脱使役化によって主語が背景化され、本来、内項として生起する要素が、主題化された可能動詞文のことを指す。

- ²⁰⁾ 可能動詞文の有生主語が、本来的に、動作主指向か、経験者指向かについては、意志動詞の中でも、語彙による出入りが認められる。例えば、「話せる」は、外国語を内項として選択する場合、特定の人物に限られた能力を表すため、主語は動作主として解釈されるのが自然である一方、事象の実現が、主語の能力とは無関係な、外的要因を想起させる「出れる」は、主語が経験者として解釈されるのが自然である。

(i) a. 太郎はロシア語が話せる (動作主) b. 僕は家から出れない (経験者)

- ²¹⁾ 井上 (1998) によれば、岩手県を含む東北地方は、ラ抜き言葉の先駆的な地域ではなく、100 年近くをかけて徐々にそれが広まった地域の一つである。従って、東北地方 (主として岩手県) 出身者を参加者として、ラ抜き言葉の容認性に関する質問紙調査を実施することは、音節数の制約の妥当性を実証的に検討する点においても重要と言える。

- ²²⁾ 4 音節動詞で構成された動詞群 II ($M = 3.30, SD = 0.86$) と動詞群 IV ($M = 3.25, SD = 0.90$) の間に、有意差は観察されなかった [$t(42) = 1.16, p = .029$]。このことは、形態統語タイプの違いによって、本来、影響を受けるはずのラ抜き言葉の容認性が、音節が 1 つ増えることによって緩和されることを示唆する。

この問題の考察については、今後の課題としたい。

- ²³⁾ 本調査で考察した、2 種類の形態統語タイプと異なる形態の示唆性を示す、その他のタイプの動詞で刺激文を構成した場合においても、同様の結果が得られるか否かを検討することは、音節数の制約の有効性を多面的に考察する上で重要であるが、今後の検討課題としたい。

- ²⁴⁾ 動詞群 III・IV に属する動詞の中には、「妻は (黙って) 夫を立てた」「監督は (頭の中で) 一通り打順を並べた」のように、主語が、事象の成立に直接的に関与しない他動詞表現を許すものが少なくないという事実は、この分析の支持証拠になるかもしれない (高橋・江村 2016)。

- ²⁵⁾ 中石 (2016) で報告されている発話資料は、日本語を学習中の二人の子どもの自然発話に基づいたものであるが、同じ時期に一定程度、このような誤用が均一に観察されるのであれば、それは誤用というより、動詞句構造の普遍的な階層性の発現が関与している可能性がある。

²⁶⁾ ここで言及されている「可能動詞と自他交替の獲得の時系列上の並行性」とは、子どもが、可能動詞と下一段他動詞を混同して発話したと推察される、(30a-b) のような発話例に加えて、2歳頃の子どもが、可能形態素 *rare* を音声的に具現することなく、「可能」の意味の伝達を試みている例として報告されている、以下のような文に基づいている（大久保 1967, 伊藤 1990）。

(i) シメ ϕ ナイワヨ (2;3) cf. 閉められない (大久保 1967)

高橋・江村 (2017) は、この類の例がいずれも下一段他動詞であることに着目し、これらの文は、可能動詞文の *rare* が音声上、具現されていないのではなく、この月齢時の子どもが、接辞 *e* について、可能形態素か他動詞形態素かを、明確に区別することなく産出していることを示す、経験的証拠として再解釈している。

²⁷⁾ 2歳半頃になると、自他の誤用が収束に向かうことや、使役形態素 (*s*)*ase* の生産的な産出が始まること等が、この月齢時に、子どもが、*v* に対する語彙挿入ができるようになると分析する、経験的証拠とされている (Murasugi and Hashimoto 2004, Fuji, Hashimoto, and Murasugi 2008)。

²⁸⁾ Goro et al. (2007) の提案は、「ジョンはすべての本を読み忘れた」のような、補文中に含まれる数量詞の作用域解釈に関する、大人を参加者とした質問紙調査及び子ども参加者とした真偽値判断課題の結果に基づいている。